

『アホウドリと「帝国」日本の拡大：南洋の島々への進出から侵略へ』

平岡, 昭利

<https://hdl.handle.net/2324/1485069>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（4）

アホウドリと「帝国」日本の拡大—南洋の島々への進出から侵略へ

論文審査の結果の要旨

本論文は、明治期以降の日本による太平洋の島々の領土化と開拓の契機がアホウドリの捕獲とその羽毛の輸出にあったことを、丹念な史資料の渉猟と綿密な分析により明らかにしたものである。

本論文は4部構成となっている。第I部「アホウドリと日本人の無人島進出」では、アホウドリの羽毛の輸出のために、太平洋の島々に日本人が進出した模様を描いている。まず、1887年に八丈島在住の大工玉置半右衛門がアホウドリの羽毛輸出のために鳥島を開拓したこと (I-1章)、同様に水谷新六が南鳥島を開拓したこと (I-2章)、古賀辰四郎が尖閣諸島を開拓したことを述べるが (I-3章)、略奪的手法ゆえの資源の激減や災害等によりやがて消滅にいたったことや (I-4章)、いわゆる疑存島も含めた探検競争の顛末についても述べている (I-5章)。

第II部「バード・ラッシュと日本人の太平洋進出」で著者は、こうしたアホウドリ熱を、グアノ (鳥糞石) を求めた米国人によって展開された「グアノ・ラッシュ」と対比させて「バード・ラッシュ」と定義し、ミッドウェー諸島やウェーク島など北西ハワイ諸島の島々への日本人の進出と米国とのコンフリクトを描いている。すなわち、北西ハワイ諸島は米国人によるグアノ・ラッシュと日本人によるバード・ラッシュとの接触地域となり (II-1章)、日本人によるミッドウェー諸島の借り入れに結びついた (II-2章)。その結果、危惧をいだいた米国が鳥類捕獲禁止令や鳥類保護法を制定したため、アホウドリを目的とした日本人の進出は当該地域における日本人排斥運動につながり、数多の鳥類密猟事件を引き起こしたのである (II-3・4章)。これらの密猟者たちが、1898年に施行された遠洋漁業奨励法に、表向きは遠洋漁業目的で申請し多額の奨励金を得ていたという指摘も興味深い。

第III部「バード・ラッシュから無人島開拓へ—大東諸島とその後の展開—」では、舞台を大東諸島に移し、当初はアホウドリ目的で入島したこれらの島々が、やがてサトウキビ栽培やリン鉱採掘の島へと変質していったことを述べている。南大東島では、当初はアホウドリ目的で開拓が進められたものの、その後サトウキビの栽培へと行為目的が変わり、玉置商会によって八丈島からの入植者と沖縄からの出稼ぎ者により開拓が進められたが、やがて東洋製糖 (のちに大日本製糖) という大資本の手に経営が移った (III-1章)。一方、開発が遅れた北大東島では、1910年以降にサトウキビの栽培とリン鉱石の採掘が開始された (III-2章)。さらに、沖大東島 (ラサ島) でもリン鉱へと行為目的が転換し、その後のスプラトリー (南沙) 諸島への進出につながった (III-3章)。

最期に第IV部「南洋の島々への進出から侵略へ—アホウドリからグアノ・リン鉱採掘へ—」では、台湾近海や南シナ海などへのリン鉱採掘を目的とした進出の経緯を述べている。まず第IV-1章で、台湾北部にある棉花嶼などの無人島にリン鉱を求めて日本人が進出したことを述べ、続くIV-2章ではプラタス (東沙) 島へのリン鉱採掘のための進出について述べ、IV-3章では、第一次世界大戦後の南洋群島への進出とその顛末を述べている。

以上のように、本論文が述べるのは、明治期以降の帝国日本の領土拡大が国家主導によるものというよりむしろ、アホウドリにより一攫千金を夢見た山師的な人々の行為目的の結果なのだということであり、そうした行為目的は、小笠原諸島、大東諸島、尖閣諸島、南鳥島など今日の日本の領土形成に寄与するとともに、北西ハワイ諸島や南シナ海、さらにはマリアナ諸島など、今日の日本の領土をはるかに越える範囲にまで及んだのである。

本論文の出発点は、本論文の提出者が修士論文で取り組んだ南大東島でのサトウキビ栽培にあった。その時抱いた、「果たしてサトウキビ栽培という目的だけで、断崖絶壁に取り囲まれた孤島の開発が展開するのであろうか」という疑問が、その後40年近くに及ぶ申請者のたゆまぬ理由の追及によって本論文に見事に結実した。本論文が地理学関連の学会で学会賞をいくつも授与されただけでなく、朝日新聞、史学雑誌等の著名な紙誌の書評において高く評価されていることも、本論文が卓越した水準にあることを物語っている。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士 (文学) の学位を授与されるにふさわしいものであると認めるものである。